国立国会図書館月報

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2018.1

国立国会図書館にない本　明治前期の手紙作法の本

NDLとOPAC

資料の世界の歩き方　変体仮名でめぐる資料あれこれ

70th

過去を読み、未来を読む。

681号　2018年1月

新年のごあいさつ

国立国会図書館長　羽入　佐和子

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

今年、国立国会図書館は開館70周年という記念すべき年を迎えました。

これまで皆様からいただきました多大なご支援、ご協力に心から感謝申し上げます。

70年前の昭和23（1948）年に、国立国会図書館は立法補佐機関として国会に設置され、その使命が国立国会図書館法の前文に掲げられました。

「国立国会図書館は、真理がわれらを自由にするという確信に立つて、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、ここに設立される。」

国立国会図書館の理念とも解されるこの前文の意義を改めて心にとどめて、国立国会図書館活動のいっそうの充実に努めてまいりたいと存じます。

開館70周年にあたり、いくつかの記念行事を企画しておりますが、その一環として秋には東京本館と関西館において展示会を開催し、開館以来当館が収集してきたコレクションの一部をご紹介いたします。

また、国立国会図書館の業務の基盤である納本制度と支部図書館制度も70周年の節目を迎えますことから、それぞれの制度の意義について、国内外の専門家をお招きしてシンポジウムを開催する予定です。

さらに、議会図書館の国際組織、アジア太平洋議会図書館長協会（APLAP）の大会を東京本館で開催することも決まりました。

これらの企画を通して、これまで以上に多くの方々に国立国会図書館をご理解いただけましたら幸いです。

ところで、国立国会図書館の目的について国立国会図書館法第2条では次のよう

過去を読み、未来を読む。

に定められています。

「図書及びその他の図書館資料を蒐集し、国会議員の職務の遂行に資するとともに、行政及び司法の各部門に対し、更に日本国民に対し、この法律に規定する図書館奉仕を提供することを目的とする。」

この目的を遂行するために、国立国会図書館の活動を「国会活動の補佐」、「資料・情報の収集・保存」、「情報資源の利用提供」に重点化し、昨年、中期ビジョン「ユニバーサル・アクセス２０２０」を定めました。このビジョンでは、図書館資料が時間を超えて受け継がれ、空間的な制約も超えて多くの人々にとってアクセスできる環境の整備を目指しています。

国立国会図書館には常に長期的視点をもった活動が必要であり、そこでこの度の中期ビジョンでは、２０２０年までの間を基盤強化の期間とし、さらにその先の創立１００周年に向けて社会の変化に対応できる体制を整えることを重視いたしました。

創立以来の70年を顧みますと、当館を取り巻く環境は著しく変化し、とりわけ近年は情報のデジタル化に伴って膨大な量のデジタル情報が絶え間なく流通し資料の形態も急速に多様化しています。このような状況の中で情報資源を収集し保存し、それらを体系的に整理して提供することには困難も伴いますが、国立国会図書館として担うべき役割を改めて認識しつつ、わが国の貴重な知的資産が豊かな未来の創造に資するように努めてまいりたいと存じます。

70年前に崇高な理念を掲げて設置された国立国会図書館がその使命を堅実に果たすことができますよう全館を挙げて取り組んでまいります。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

国立国会図書館月報

NO. 681
JANUARY 2018

CONTENTS

新年のごあいさつ
3 海を渡った錦絵カレンダー
——川俣絹布整練株式会社明治四十三年カレンダー
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から
6 国立国会図書館にない本
明治前期の手紙作法の本
12 資料の世界の歩き方　変体仮名でめぐる資料あれこれ 1
変体仮名、よんでみようかな
16 NDLとOPAC　1989-2017
23 数字で見る国立国会図書館
『国立国会図書館年報　平成28年度』から
22 館内スコープ
カード目録に別れを告げるころ
26 本屋にない本
『アラブ・イスラム世界の現代戯曲
紛争地域から生まれた演劇 5』
27 NDL Topics

表紙：
杉浦非水 画『非水一般応用図案集』より
平安堂書店 刊
大正 10 年　図版 42 枚　32cm
国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます（モノクロ）。
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/967554/29

海を渡った錦絵カレンダー
――川俣絹布整練株式会社明治四十三年カレンダー

藤田　千紘

[川俣絹布整練株式会社
明治四十三年カレンダー]
[1909]
13枚　37×25cm
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9369552

年の初めに新調するものといえば、カレンダー。誰もが使う実用品であり、日常的に目に触れることから、企業や団体が広告入りのカレンダーを制作して得意先などに配ることもしばしば行われます。

ここにご紹介する資料も、その一例です。色鮮やかな錦絵に日英併記の暦が添えられたこのカレンダーは、輸出向けの羽二重（絹織物の一種）を生産していた川俣絹布整練（かわまたけんぷせいれん）株式会社が、商品に添えて海外の顧客へ送ったものです。

福島県の川俣町は古くから養蚕・機織業で知られ、明治時代には横浜港を経由して絹織物の輸出も行われるようになりました。しかし、整練[1]を行う大規模な工場が存在しなかったために品質が一定せず、輸出先から苦情を受けることもたびたびでした。

そこで、絹織物の買い付けのためにしばしば川俣町を訪れていた商人の忽那惟次郎（くつなこれじろう）が、町長らの要請を受けて、横浜の財界人から募った資本金2万5千円により明治32（1899）年に同社を設立します。忽那は元治元（1864）年に伊予国（現在の愛媛県）に生まれ、大阪の呉服商で奉公したのち横浜で貿易業に従事し、やがて独立して絹物売込業で成功を収めた人物です。

カレンダーにも刷り込まれている「鹿印」

広告文が記載されたカレンダーの表紙。明治41年に東宮(のちの大正天皇)の行啓を受けたことが記されているほか、同社で整練された羽二重の優れた特徴が列挙されている。羽二重の重量を示す単位には「MOMME(匁)」が用いられており、商標には鹿の角があしらわれている。

をトレードマークとした同社が手掛ける絹織物は、本格的な整練工場で加工され、質の良さから海外で好評を博しました。明治37(1904)年のセントルイス万国博覧会では、整練分野で本邦初の賞牌を受けてもいます。

錦絵入りカレンダーの制作は、忽那の発案で明治42(1909)年から4年間続けられました。このアイデアの背景には、当時盛んであった正月用引札(ひきふだ)[2]の存在や、同時期にちりめん本のカレンダーが輸出され人気を得ていたことなどがあったと推測されます。

明治43年のカレンダーには、月ごとに小林清親(1847-1915)の印が押された美人画が用いられていますが、これらの図柄は、清親が過去に刊行した美人画のシリーズである『花模様』と重複しています。『花模様』の版元のひとつであった滑稽堂

川俣町に所在していた、川俣絹布整練株式会社工場の外観。ここで整練された製品が世界へ送り出されていった。
福島県 編『福島県写真帖』小栗栖香平、明41.9
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/763455/61

3月、8月、11月のカレンダー。いずれも小林清親の印がある。

秋山武右衛門は、所有する版木を再利用して川俣絹布整練株式会社カレンダーの制作にあてたとみられており、このカレンダーも同様に制作された可能性がありますが定かではありません。別の年に出された暦では、版木の再利用によって水野年方、池田輝方らの美人画が使用された例もあるようです。画面の余白には商標と暦が、下部には社名と宣伝文句が、いずれも青一色で刷りこまれています。

一方、表紙はカレンダーのために新たに描かれており、水野秀方（1875-1944）の印が押されています。「鹿志るし」と書きつけた短冊を手にした女性は、崇峻天皇の妃で、川俣町に養蚕や織物を伝えたという伝説のある小手子（こてこ）です。その背景には、商標の鹿印と同様、雌雄の鹿の仲睦まじい姿が描かれています。

また、同じ年に絵柄違いの複数のバージョンが制作されていたらしく、楊州周延（1838-1912）の美人画が添えられた同じく明治43年のカレンダーがボストン美術館に所蔵されています。[3]

海を渡ったこれら「鹿印」のカレンダーは、美しい錦絵で暮らしを彩り、川俣産羽二重の存在を大いにアピールしたに違いありません。

最後に、「なぜこのカレンダーが国立国会図書館に所蔵されているの？」とお思いになった方へ。本資料は、昭和62（1987）年に堀田両平氏から当館へ寄贈されたコレクションのひとつです。堀田氏は、明治12（1879）年に名古屋で創業された堀田時計店（現株式会社ホッタ）の4代目で、寄贈された約6千種の蔵書や資料のなかには、モルガン『時計の目録』の豪華本などのほか、伊勢暦をはじめとする古暦類や多彩な広告暦が大量に含まれています。

なお、当館が所蔵する暦類は、電子展示会「日本の暦」[4]でもその一部をご覧いただけます。新たな一年の始まりに、私たちの日々に寄り添う暦にあらためて注目してみてはいかがでしょうか。

(1) 精錬、精練などとも表記。生糸を覆う不純物を取り除き、絹特有の柔らかい肌触りや光沢を出す作業。
(2) 年末年始に商店が顧客へ配布した、広告のための印刷物。極彩色で吉祥画像などが描かれ、暦が添えられたものもあった。
(3) http://www.mfa.org/collections/object/calendar-print-for-december-1910-woman-in-a-blue-kimono-holding-a-ball-155612 他
(4) http://www.ndl.go.jp/koyomi/

○参考文献
「川俣絹布整練株式会社」『東京朝日新聞』明治32年5月28日　朝刊2ページ
「鹿印整練羽二重の名誉」『読売新聞』明治37年10月29日　朝刊4ページ
『横浜市史.第4巻 上(明治後期の横浜)』横浜市,1965年
川俣町史編纂委員会 編『川俣町史.第3巻(資料編2近代・現代)』川俣町,1979年
小野沢うばら「寄贈二話」『国立国会図書館月報』319号,1987年
岩切信一郎「メディアとしての近代版画史(第5回)明治の大量出版物--暦とカレンダー」『版画芸術』39(3)(通号150),2010年
『広報かわまた』2014年6月号
清親[画];町田市立国際版画美術館編.『清親:光線画の向こうに』町田市立国際版画美術館,2016年

明治前期の手紙作法の本

国立国会図書館にない本

鈴木 宏宗

手紙作法の本

「謹賀新年」、「新年あけましておめでとうございます」等、年賀状の冒頭は決まった文句で記されることが多い。昔の手紙も、独創的というよりも定型に則ることが重要で、手紙の作法、書き方を指南した本が多数刊行されてきた。古くは、江戸時代以前の往来物（往復書簡などの手紙類の形式をとって作成された初等教育用の教科書）などにさかのぼることができる。[1]

さて、筆者が明治期の手紙作法の本に注意を向けるようになったのは、憲政資料室に配属されてからである。幕末・明

See also...
「国立国会図書館にない本 戦前から占領期の出版物」(612(2012年3月)号)
「国立国会図書館にない本(続編)　戦前・占領期の雑誌を求めて」(640/641(2014年7/8月)号)
「国立国会図書館にない本(続編)　戦前・占領期の雑誌を求めて2」(663(2016年7月)号)
「国立国会図書館にない本　内務省納本雑誌との出会い」(673(2017年5月)号)

治以降の手紙を読む際には、くずし字の解読に加えて、手紙独特の用語や言い回しの知識が必要であるものの、これらがなかなかわかりにくい。例えば「拝啓」は今でも使われているが、「朶雲」、「華墨」といった見慣れない用語（両方とも相手の手紙を表す）も用いられている。文章も、いわゆる古文とも異なる「候文」で書かれていることが多い。そこで、同時代に刊行された手紙の作法の本が参考になる。[2]

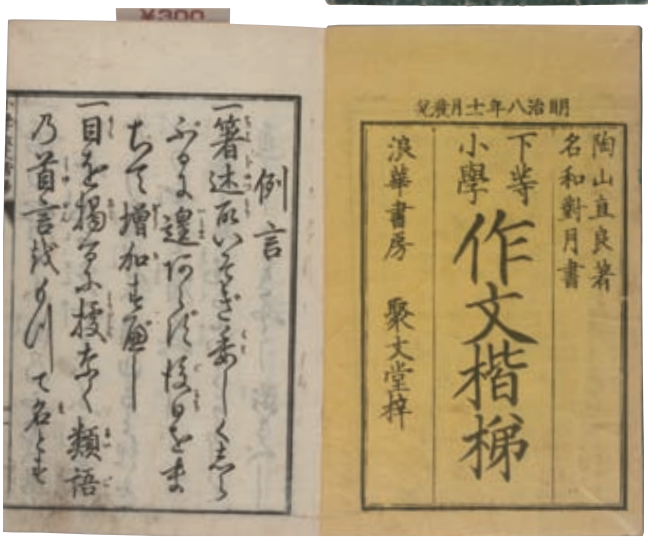
手紙作法の本は、国立国会図書館（以下「NDL」）のデジタルコレクションでも見ることができるとはいえ、本はページを手でめくるのが簡便である。そこで、古本屋や古書即売展で見かけた折に、個人的にいくつか購入してみた。すると、こうした本のいくつかは、NDLに所蔵がないことに気付いた。どうして所蔵されていないのであろうか。ここでは二冊を具体的に取り上げてみたい。

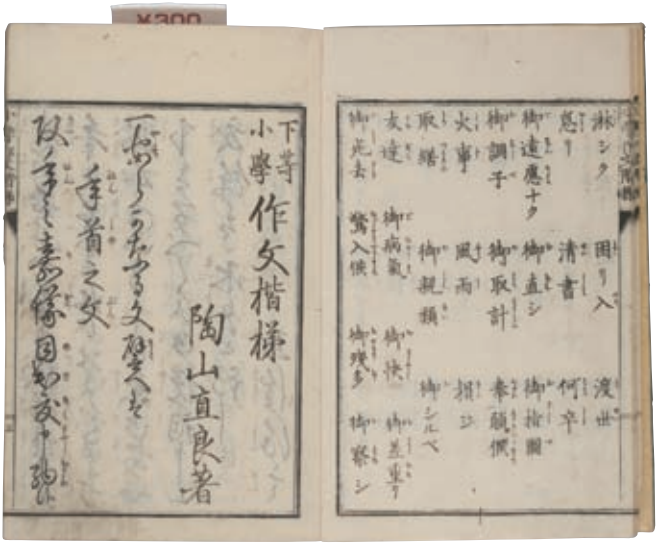
ない理由…

『下等小學作文楷梯』陶山直良著、名和對月書（聚文堂、一八七五）（以下「作文楷梯」）（図①）

『小學書牘　文證大全』安井乙熊編、青木輔清校、卷菱潭書（内田彌兵衛、一八九〇）（以下「文證大全」）（図②）

それぞれの内容をみると、「作文楷梯」





図①
『下等小學作文楷梯』
表紙、見返し、本文冒頭（筆者蔵）

は、「楷梯（かいてい）」（はしご）の名のとおり入門書で、手紙の具体例、「拝啓」、「謹啓」といった手紙によく使われる用語を列挙している。一方「文證大全」は、新年の挨拶などの手紙の例文に加えて、物品受取書や出版届の雛形など一般的な手紙以外の情報も載せており、角書の「小学」の枠からはみ出ているようにもうかがえる。

どちらも古書即売展での購入本である。ＮＤＬには所蔵されておらず、「作文楷梯」の方は、国立教育政策研究所教育図書館[3]（以下「教育図書館」）と筑波大学附属図書館中央図書館に、「文證大全」は、その刊行年が購入本の一〇年前にあたる一八八〇年の本が、教育図書館と東京大学大学院人文社会系研究科文学部図書室にあることがわかった[4]。つまり二点とも共通して教育図書館が所蔵していたのである。

教育関係の出版物なので、国立教育研究所編『教育文献総合目録 第3集 第1（明治以降教科書総合目録 第1）』（小宮山書店、一九六七）[5]をひも解いてみた。当然「作文楷梯」と「文證大全」は教育図書館の所蔵と記載されそれぞれの蔵書印の情報も載っていた。前者には「東京書籍館、Tokio Library、東京府書籍館蔵書印」、後者には「東京図書館蔵書之印」がそれぞれ押されていることがわかった。これは、ＮＤＬの蔵書の源流にあたる機関[6]が所蔵していたことを意味する。同目録の「自序」によると、ＮＤＬの小・中・高等学校教科書は、文部省からの依頼により、昭和二五年三月に国立教育研究所（国立教育政策研究所の前身）に移管しており[7]、これらも、タイトルに「小学」とあるために小学校の教科書とみなされて渡されたのである。つまり、「国立国会図書館に（かつてはあったが今は）ない本」だったのだ。

「文證大全」の改題本……ほぼ同じなのに

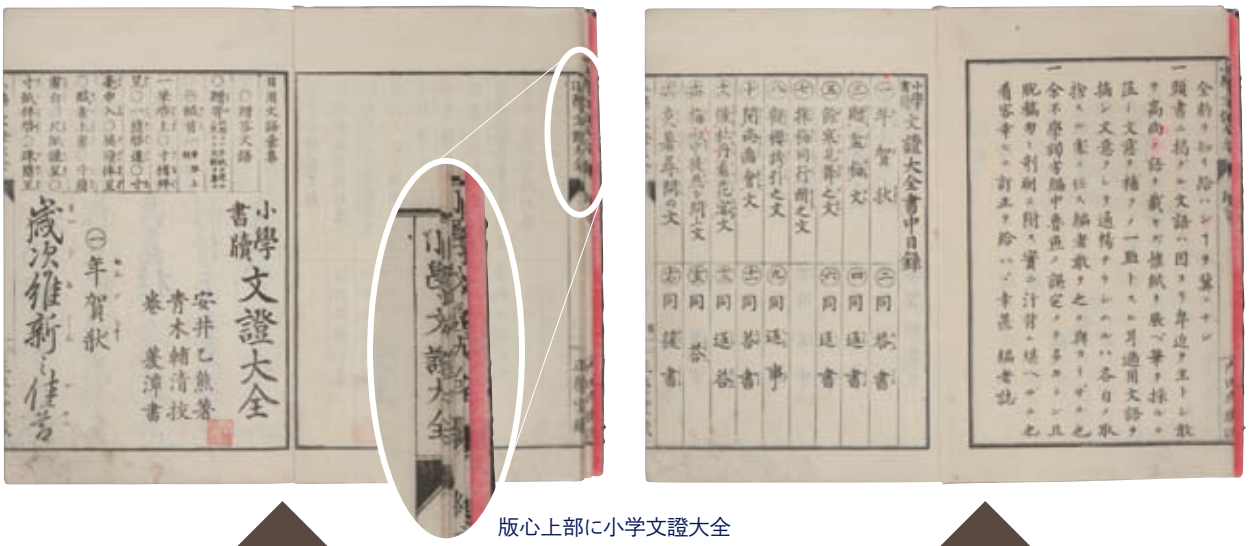
「文證大全」の刊行年が一〇年違う点については謎が残る。複数のデータベースで調べてみると、同じタイトルで同じ著者の本は一八八〇年の刊行物のデータしか出てこない。そこで、ＮＤＬのデジタルコレクションで、作成者の名前（安井乙熊、青木輔清、卷菱潭）やタイトルの一部（文證、大全）を組み合わせたりして、いろいろとさがしてみた。すると、『新撰日用文證：頭書文語』安井乙熊（正栄堂、一八九一）[8]という、筆者の購入本と似たような本が出てきた。

すでに手元にある「文證大全」と比べると、目録や本文は同じで、一八八〇年出版の「文證大全」の改題に当たるものと見なせる。しかし、タイトルに当たる部分が取り換えられ、緒言がなく、版心の上部が空白になっていた（図③）。なお、正栄堂は、文證大全の出版者である内田彌兵衛の経営する出版社である。つまり、内容は同じでも、タイトルに「小学書牘」とある本は、教科書の類として国立教育研究所に移管され、手紙の書き方とのみ受け取れるタイトルの本はＮＤＬに残ったのである。

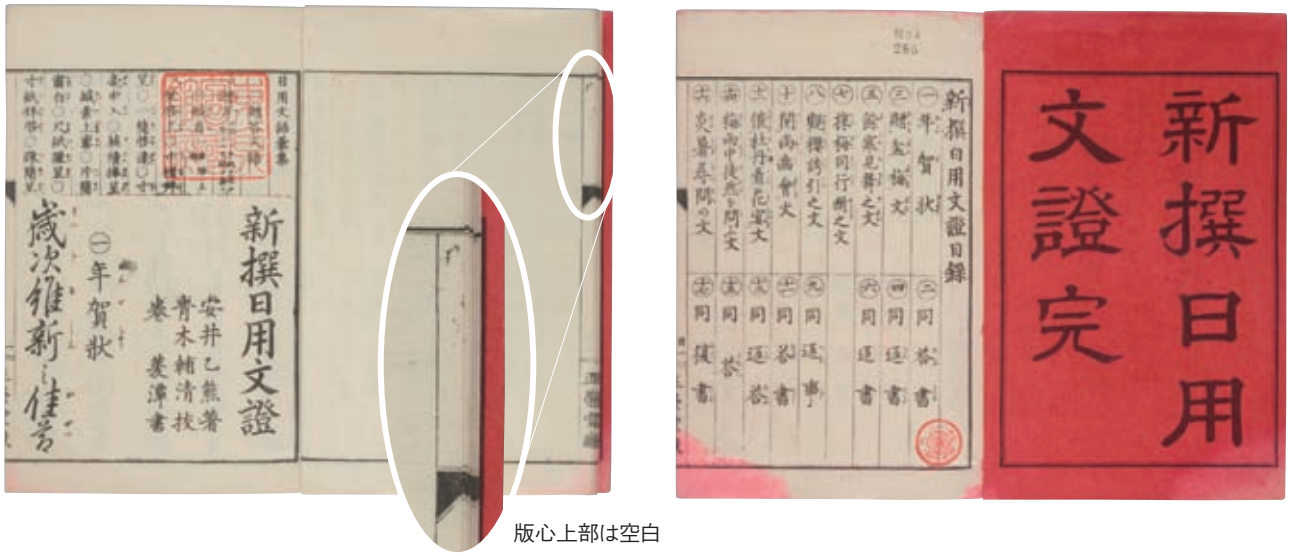
教育政策研究所教育図書館にて

実際に、教育図書館の蔵書になっている二冊を見に行くと、「作文楷梯」は同図書館内の端末のデジタル画像で、「文證大全」は現物で閲覧でき、手持ちの資料と対照することができた。

図②
『小學書牘　文證大全』
表紙、見返し
目次、本文冒頭　（筆者蔵）



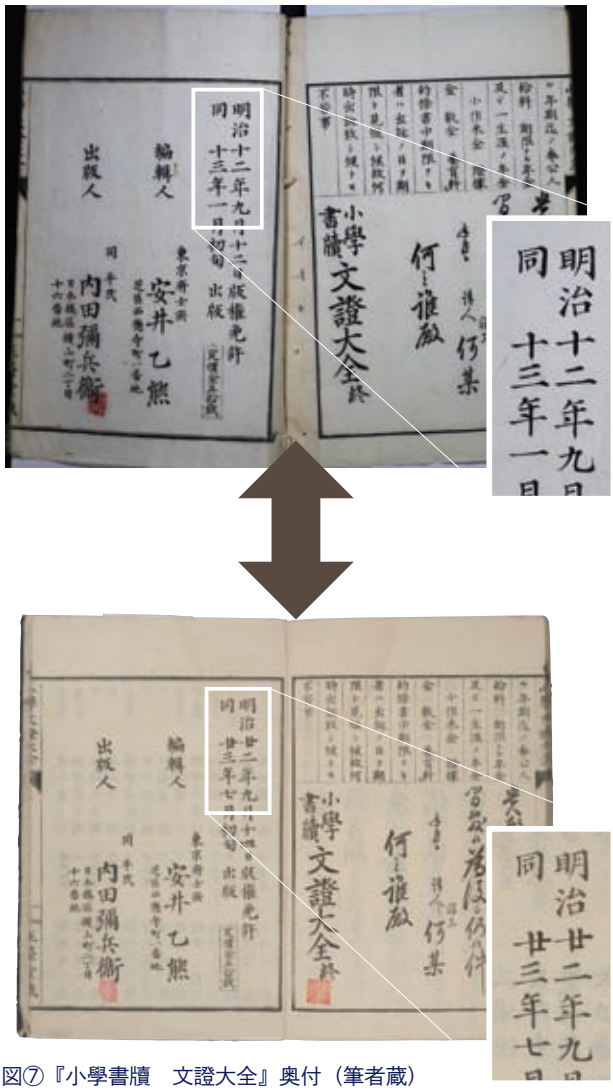
版心上部に小学文證大全



版心上部は空白

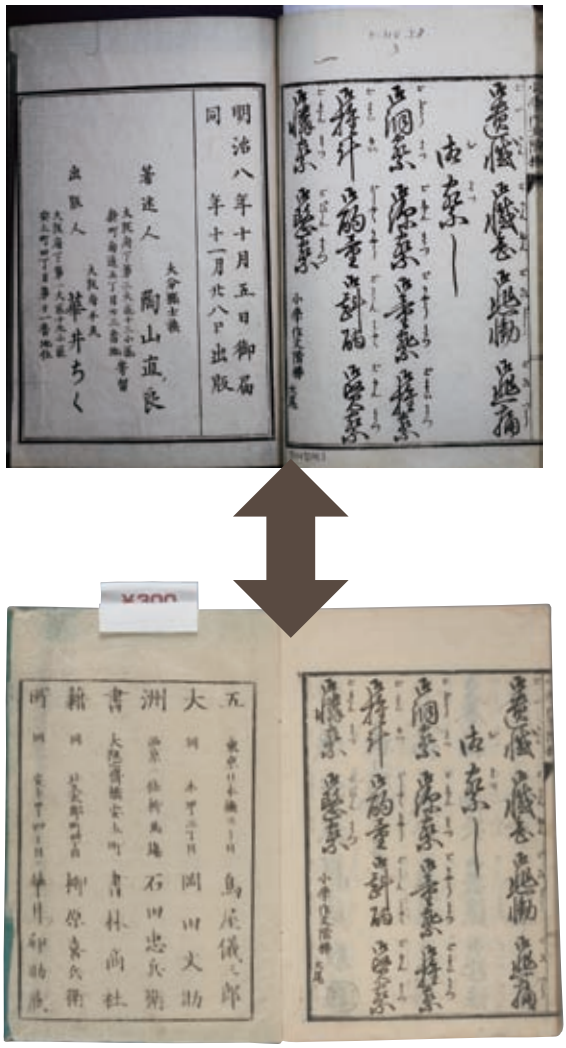
図③『新撰日用文證：頭書文語』目次、本文冒頭　（国立国会図書館蔵）
国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/864940　モノクロ）

図⑥ 『小學書牘　文證大全』 奥付
（教育図書館蔵　請求記号 K110.71||18.1）



図⑦『小學書牘　文證大全』奥付（筆者蔵）

図④ 『下等小學作文楷梯』 奥付
（教育図書館蔵　請求記号 K110.83||3）



図⑤『下等小學作文楷梯』奥付（筆者蔵）

教育図書館所蔵本のラベルから

貼られているラベル[10]から次の情報が分かる。「作文楷梯」の「乙ノ…」は東京書籍館時代のラベル、楕円形の「東京府書籍館」、その上に「大日本教育会書籍館」のラベルが貼られている。「文證大全」には「東京府書籍館」、その上に「大日本教育会書籍館」のラベルがある。両書とも大日本教育会の書籍館に貸していたのである。それぞれの右上のラベルは帝国図書館の「乙部」（保存のみで内覧に供していなかった資料群）ラベルであり、東京書籍館の後身である帝国図書館に返却された後には、利用者に提供されていなかったことわかる。

中身を確認すると「作文楷梯」の本文は当然のことながら同じであるが、奥付の表記は異なっていた。教育図書館所蔵（東京書籍館旧蔵本）の奥付には、届出、出版年月日と著述人、出版人が刷られている（図④）のに対し、購入した方には「五大洲書籍所」と六軒の書籍商の名前が並んでいる（図⑤）。販売促進のために奥付に当たる部分を取り換えたのではないだろうか。

「文證大全」は、大きさ、版面ともに同じであるが（図⑥、⑦）、よく見ると購入した本の奥付の表記は墨で加筆されていた（図⑥、⑦拡大部分）。これでは、各種の目録やデータベースに同じ年に刊行された本として出てこないはずである。

この「文證大全」の書き込みは、だれが何時手を入れたのかは不明である。

調べてわかったこと……

国立国会図書館に「ある本」の特徴

今回調べるきっかけになった二冊の本は、普通に売買されて流布したものと思われる。教育図書館所蔵本と比べると、異なるページが載っていたり、加筆があったり、違いが明白である。

同図書館所蔵の二冊は、元々、帝国図書館が所蔵していた。戦前、帝国図書館は、内務省が検閲した後の和図書の交付を受けていた。今回の比較によって、当時政府に納本されていた図書と、一般に流通していたものとでは、奥付の表記や所有者の書き込みなどの面で、異なる姿を示すことがあり得ることがわかった。

現在ＮＤＬが所蔵する戦前の刊行物の多くは、帝国図書館旧蔵書が占めている。もちろん、それらすべての本が流布本と異なるというわけではないだろうが、戦前の検閲を通った本のコレクションということは言えるであろう。[9]

近年は、近代の書物・出版史、特に本の来歴をめぐる研究が以前よりも盛んになっているようである。その際に、それぞれの本の来歴に注意をむけてもらえると、より一層、研究に資すると思われる。

1 手紙の作法を書いた本について実用書の側面から研究したものに、三村泰一「「手紙の書き方」本の研究」2014（東北大学修士論文）がある。東北大学機関リポジトリでインターネット公開。
2 近代の手紙の解読について、季武嘉也国立国会図書館客員調査員による遠隔研修サービス「近現代政治史料の概要―書簡を中心に」や、葦名ふみ「政治家の個人文書を使う」『参考書誌研究』78 号、2016.12 <当館請求記号 Z21-291 >が参考になる。いずれも当館ホームページで公開。
3 鈴木由美子「国立教育政策研究所教育図書館」（文書館・史料館めぐり）『日本歴史』834 号、2017 年 11 月<当館請求記号 Z8-255 >
4 CiNii による。
5 <当館請求記号 370.31-Ko548k-k >、国立国会図書館デジタルコレクションで国立国会図書館／図書館送信参加館内公開。
6 帝国図書館への蔵書の流れは、東京書籍館→東京府書籍館→東京図書館→帝国図書館のようになる。各図書館の蔵書印については、「国立国会図書館の蔵書印」（パスファインダー）で解説している。当館ホームページで公開。
7 国立国会図書館五十年史編纂委員会編『国立国会図書館五十年史 資料編』国立国会図書館、2001 <当館請求記号Y H 231-679 >（CD−ROM）の年表、1950 年 3 月 1 日の項。
8 <当館請求記号 特 34-285 >、国立国会図書館デジタルコレクションでインターネット公開。
9 小林昌樹「帝国図書館本における納本分の見分け方」『文献継承』26 号、2015.3、金沢文圃閣ホームページで公開。
10 ラベルについては『国立国会図書館月報』<当館請求記号 Z21-146 >の連載「ラベルと請求記号」118 号～ 165 号 1971.1 ～ 1974.12 で紹介しており、東京書籍館は 118 号、東京府書籍館は 119 号、大日本教育会書籍館は 123 号、東京図書館は 120-124 号、帝国図書館は 128-135 号で紹介している。国立国会図書館デジタルコレクションで館内公開。

資料の世界の歩き方
変体仮名でめぐる資料あれこれ 1

変体仮名、よんでみようかな

藤田　壮介

やあみんな、
オイラは平成生まれの筆の妖精！
運動が得意！ でも文字を読むのは
ちょっと苦手……。これから一緒
に文字の読み方を勉強しよう！

今年もお正月になったから書初めをしなくっちゃ。今年は何を書こうかな。

おーい、なんで毎年お正月にオイラの出番が来るんだい？　まだ寝ていたいのに。

それはね、お正月に書初めをするっていうのが習慣になっているからだよ。平安時代の公家・武家から始まった習慣らしいけど、江戸時代には寺子屋でも年中行事になっていたみたいだよ。

ふ～ん、そうなのか。ところで「寺子屋」って何なんだい？

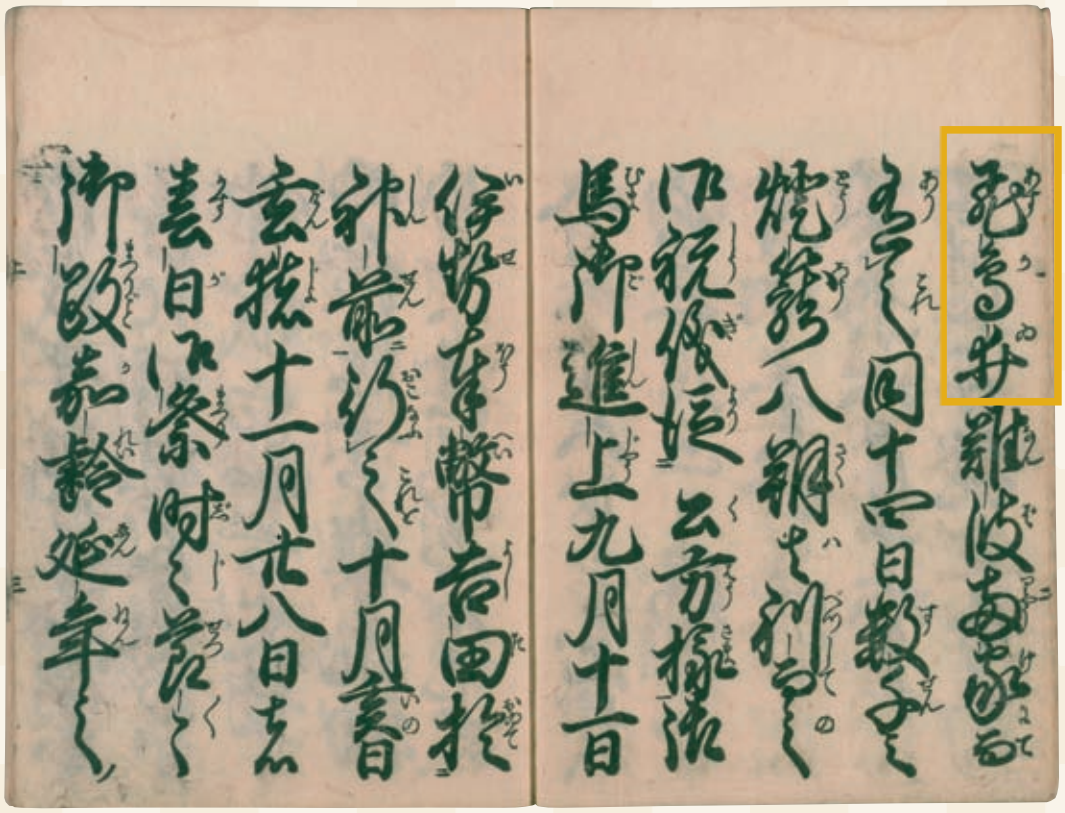
寺子屋っていうのは、分かりやすく言うと江戸時代の小学校、かな。今の小学校みたいにみんなで授業を受けるっていう感じではなくて、やってきた子どもたちがそれぞれで勉強をして、その寺子屋の師匠に見てもらっていたらしいよ。勉強の内容は、文字を書いて覚えることが中心だったみたい。

文字を書くってことは、使うのはもしかしてオイラたちみたいな筆かい？

もちろんだよ。みんな筆と墨で文字を書いていたんだ。

オイラもその頃に生まれていたら、もっと文字が読めたかなぁ。その頃のご先祖様たちが羨ましいな。

そうだ、これを見てごらん。



『洛陽往来』
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2540041/5

読めないよ！

寺子屋で使われていた教科書なんだけど。

なんだいこれは？　普段オイラが書いているのとは違うだいぶややこしい文字で書かれてるぞ。

これは往来物と呼ばれる、寺子屋で使われていた教科書の一つで、文字は「御家流（おいえりゅう）」という草書で書かれているんだ。君のご先祖様たちはこういう字を書いていたんだよ。

すごいなあ。こんな字も書けたのかあ。

でも逆にご先祖様たちは楷書はあまり書けなかったかもしれないよ。ご先祖様たちの眼には楷書を書ける君の方が立派に見えるんじゃないかな。

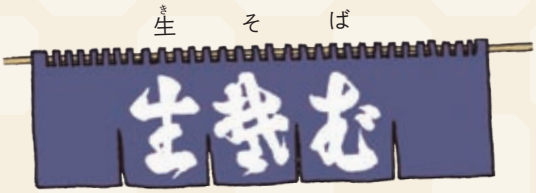
そんな慰めはいいやい。この字の右側に小さく書かれているのはきっと振り仮名だよね。これならオイラにも読めるぞ。よーし先頭から読もう！「あす……」？　あれ？　この次の字はなに？　ひらがなにこんなのないよ？

どれどれ。ああ、これはいま習うひらがなとは別の形のひらがなで、変体仮名って呼ばれるものなんだ。

別の形のひらがなってどういうこと？

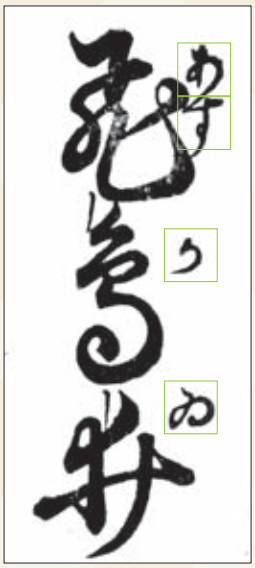
ひらがなってどうやってできたか知ってる？

もともとは漢字だったんでしょ。それがだんだん崩して書かれるようになって、ひらがなになったんだよね。



赤いワク内が変体仮名だよ。
「ゐ」は見たことあるよね。

これもひらがななんだ！！



そのとおり。でも漢字って沢山あるでしょう。昔は、たとえば「あ」を表わすひらがなにも、今と同じ「安」を崩したものの他に、「阿」を崩したものなんかもあって（上図参考）、ひとつのひらがなにもいくつも形があったんだ。いまでもおそば屋さんの暖簾とか、割箸の袋とかで変体仮名を目にすることはあるね。

じゃあ覚えなきゃいけないひらがなは今よりもっと多かったんだ。ご先祖様たちはやっぱりすごいなあ。

そう言われればそうだね。明治三十三年に変体仮名を廃止する方針が決められて、学校では教わらなくなっていったんだよ。

そんなの聞いたことなかったなあ。ところでそろそろ「あす」の下はなんて書いてあるのか教えてよ。

ああ、そうだったね。「あす」の下は「か」と「い（ゐ）」だよ。この「か」は今のひらがなみたいに「加」から出来た文字ではなくて「可」から出来たんだ。

ふ～ん。ちょっと丸まった「ク」みたいなのが「か」かあ。全然違うね。

そう。だから全部続けて読むと「あすかい」だね。

あすかい……あすかい……。ひょっとして漢字は「飛鳥井」って書いてある？

よくわかったね。そのとおりだよ。

Column

江戸時代の草書と楷書

現在は、漢字を教わる際にまずは楷書から始めますが、江戸時代には、前のページに掲載されているような形の字をまず習いました。これは御家流（青蓮院流）と呼ばれる草書の一種で、江戸時代には幕府の公用文書に用いられたものです。江戸時代の人が書類を作成するときには文字を御家流で書く必要があったため、寺子屋でも御家流が教えられていました。

江戸時代に出版された本の文字も、ほとんどが御家流です。楷書のものも存在しますが、それらは仏典や儒学の経典、あるいは蘭学の書物等、学問的な書物が中心でした。

明治時代になると、政府の刊行物も楷書が使われるようになり、楷書が次第に一般化していきます。明治後期には、学校でも楷書を主として教えるようになっていきました。

で、何て書いたのさ？

（絵・正保五月）

そう思って見ると、御家流でもなんとなくそんなふうに見えてくるなあ。ほかのところも振り仮名がわかれば読めそうな気がしてきたぞ。

そうだね、振り仮名さえわかれば結構読めるようになりそうだね。そうだ、むりやり起こしちゃったお詫びに変体仮名を教えてあげようか？

えー、勉強するの？…でもご先祖様たちが書いていた字は気になるから、お願いしてあげないこともないよ。

では決まりだね。これから君が一通り変体仮名を覚えるまで教えてあげるよ。

よーし、やるからには早く全部覚えるぞ！

「資料の世界の歩き方」の新しいシリーズ、「変体仮名でめぐる資料あれこれ」が始まりました。来月号から、実際に国立国会図書館が所蔵するさまざまな資料をとりあげて教材としつつ、本格的に変体仮名を読んでいきます。お楽しみに！

次回予告

［広重魚尽］
hhttp://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1306182

NDLとOPAC 1989-2017

2002年にサービスを開始したNDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）は、国立国会図書館（NDL）を利用する上でもっとも基本的なシステムとして、長く親しまれてきました。

既報のとおり、2018年1月から、後継システムの国立国会図書館オンライン（国立国会図書館検索・申込オンラインサービス）がサービスを開始するとともに、NDL-OPACはサービスを終了しました。

今回は、NDL-OPACが生まれる前にさかのぼり、NDLのOPACが歩んできた歴史を改めて振り返ります。

70th

過去を読み、未来を読む。

OPACがない世界

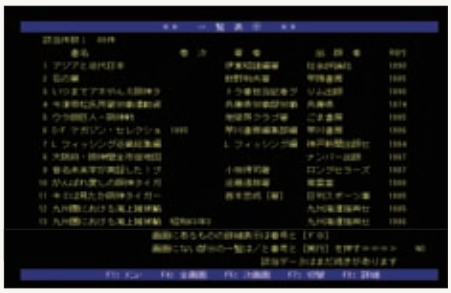
かつて、閉架式の図書館で資料を探すもっとも基本的な手段は、カード目録でした。現在は整然とコンピューターが並ぶ、NDL東京本館2階のホールは、従来「目録ホール」と呼ばれ、ところ狭しとカードボックスが並んでいました。1995年の段階で、カードは420万枚あったといいます。

書名・著者名目録、分類目録、件名目録。手慣れた利用者には、複数の方法で検索できる便利な手段だったとはいえ、初心者にとっては、国立国会図書館利用の難しさを象徴するような存在でもありました。資料を探してカードボックスの間をさまよい、カードを繰ることは、NDLの蔵書の膨大さを疑似的に体感することだったかもしれません。

しかし現実問題として、生き物のように日々増えていくカードに対し、空間的にも、利便性でも限界がくることは明らかで、また、利用者からも機械検索への要望が寄せられていました。1985年、NDL内の検討で「閲覧用目録の主体は可及的速やかにカード目録からオンライン目録へと切り替える」方針とし、1988年には分類目録と件名目録の編成が中止されます。

そして1989年、本館目録ホールに、閲覧者用の検索端末（コンピューター）4台がはじめて設置され、これ以降、目録ホールの風景が変わりはじめます。

CD-ROM 目録とJ−BISC



※画面は資料に基づく再現

検索端末で利用されていたのは、NDL が作成した全国書誌データ（国内出版物と外国刊行日本語出版物の書誌データ）を CD-ROM で提供する、J-BISC と呼ばれるディスクです。日本図書館協会により 1988 年 4 月から頒布され、公共図書館、大学図書館に急速に普及していました。

NDL 館内の検索端末も人気で、当初の4台から、1995 年には 22 台、1997 年には 38 台に増加しました（右ページ写真）。複数のディスクを入れ替えることなく、端末上で切り替えて利用することもできました。

――それはOPACではなかった

ところで、そもそもOPACとはいった い何でしょうか。英語の「オンライン・パブリック・アクセス・カタログ」の頭文字をとったものではありますが、もう少し具体的に意味を確認してみましょう。

まず「オンライン」という言葉ですが、これは必ずしもインターネット経由で提供している、という意味ではありません。オンライン目録の概念を理解するには、オンディスク、すなわち、CD-ROM等の目録と比較をしてみるとよさそうです。

一般に、CD-ROMの目録では、検索ソフトウェアを使って、ディスク内のデータを検索します。データを更新するには、ディスクを入れ替えればよいのですが、多くの端末に対して頻繁にディスクを更新するのは決して容易ではありません。

一方、オンラインの目録では、各端末から中央のホストコンピューターにあるデータを参照するため、どの端末からでも最新のデータを利用できるメリットがあります。ただし、コンピューター間をつなぐネットワークを整備する必要があり、また、ホストコンピューターには、複数の端末からの同時アクセスに対応できる高い処理能力が求められます。

1989年にNDLが実験的に導入したのはCD-ROMの目録でした（上図参照）。

ちょうどこの前年、各図書館に頒布するためのCD-ROMの目録（J-BISC）を初めて作成しており、このCD-ROMを検索端末用に活用できたため、その導入は比較的容易だったと考えられます。

検索端末の導入は利用者に好意的に受け止められました。当時のアンケートによると、端末を利用した理由について「書名・著者名などが不確か」「カード、冊子では検索できない項目での検索」などの回答もあり、積極的なニーズがあったことがわかります。この結果を受け、和図書の閲覧用目録については当面CD-ROM目録を使うことしました。[1]

パブリック・アクセス??

OPACのOに続く、PとA、「パブリック・アクセス」とは、一般の方が利用できる、ということを意味します。これも、パブリック・アクセスでない状態をイメージするのがわかりやすいでしょう。

NDLの書誌作成業務は、1977年から機械化、すなわちホストコンピューターへデータを入力する方式を採用していました。これは当初、全国書誌や冊子体の目録等の編纂を省力化することに大きなメリットがありました。納本図書館であるNDLには、全国書誌を編纂するという重要な役割もあるのです。

蓄積されたデータは、1980年から、NDL職員が業務用に検索することが可能になりました。この検索システムはNOREN と呼ばれ、長く利用されます。NOREN は、パブリック・アクセスではないオンライン目録と位置付けることができるでしょう。

一方、広く一般の方に開かれたNDLの目録としては、公共図書館等を通じて提供される冊子体の目録が、その役割を長く果たしていたと言えます。

OPAC黎明期

さて、CD-ROM端末は本格的に稼働しましたが、カード目録の編纂は物理的に一層厳しさを増し、ついに1997年3月には、その編成が完全に打ち切られます。入れ替わるように、同年4月より「和図書OPAC」と呼ばれる、館内閲覧用の検索システムの提供が始まりました。カード目録の編成を打ち切る以上、整理したばかりの新しい図書を検索できるオンラインの目録を導入する必要があったのです。

しかし、100万件以上のデータを検索できるCD-ROM端末に対し、開始当初の和図書OPACは、約10万件のデータしか検索できませんでした。システム上の負荷が高く、実用的な検索速度を得るために、データを軽量化する必要があったためです。翌年には約40万件（最近5年分）を検索できるようになるものの、それ以前の書誌を検索するには、やはり他の目録の併用が不可欠でした。

この時期は、先に稼働していたCD-ROM端末や洋図書のOPAC等[2]も併存し、広範囲に資料を探すには、かなり複雑な状況だったといえそうです。

一点特筆すべきこととして、和図書OPACには「簡易入力用端末」として、タッチパネル式の検索端末を10台中2台用意していたことが挙げられます。現在よりも、キーボードに抵抗を感じる人も多かったのでしょうか、パブリック・アクセスを意識していた、と言えるかも知れません。

とはいえ、和図書OPACは、あくまで暫定的なシステムでした。十分な同時アクセス数、応答速度など、足元の仕様を固めつつ、新しいOPAC「Web-OPAC」の開発が急ピッチで進められました。

Web-OPAC

1999年7月、Web-OPACはまず閲覧用目録として館内での提供がはじまりました。このOPACが革新的だったのは、各種資料群を同一の画面で検索できる点です。具体的には、和図書230万件、雑誌・新聞約10万件、1984年以降の雑誌記事約200万件、洋図書約18万件、洋雑誌・新聞5万件のデータをまとめて検索できました。

特に和図書のデータについては、収録件数がおよそ5倍に増えています。これは、コンピューターの性能の向上もさることながら、過去に整理されていた資料のデータを、遡ってシステムに入力する「遡及入力」の作業がこの頃までに一通り済んだためです。これにより、カード目録で提供していた明治期以降の和図書がデータベースに入力され、事実上、カード目録をひく必要がなくなりました。

Web-OPACにより、館内閲覧用目録としてのOPACは、ひとつの実用的な完成をみた、ということができるでしょう。Web-OPACは翌2000年3月にインターネット公開を果たします。同時に公開した貴重書画像データベースとともに、好評を博しました。[3]

さて、それでは、2002年に生まれたNDL-OPACには一体どのような特徴があったのでしょうか。

NDLの2002年

日韓共催のワールドカップがあった2002年。NDLにとっては、国際子ども図書館が全面開館し、近代デジタルライブラリーやWARPも始まる等、数々の大きな変化があった重要な年でした。その中でも、関西館が開館したことは、最も大きなできごとでした。

関西館の開館に合わせて、東京本館、国際子ども図書館を含めた3施設での一体的なサービスを担う新たな図書館システム「電子図書館基盤システム」を構築し、本格稼働を開始しました。NDL-OPACは、このシステムの一部をなすもので、以下のような目的をもって開発されました。

・資料の所在・利用状況の情報を提供する。
・資料利用の申込みができるようにする。

これがまさにNDL-OPACのアイデンティティといえます。

個体情報の管理

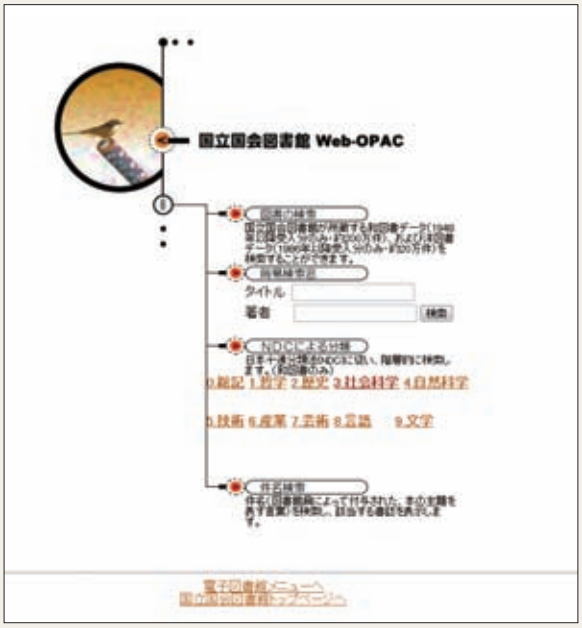
関西館の開館にあたっては、これまで東京本館が所蔵していた図書館資料を分散して配置することが避けられません。配置したあとも、関西館と東京本館の間で資料取寄せ等のやりとりも頻繁に発生します。ある資料が、今どこに、どのような状態であるのかを管理することが、実務上必要不可欠となりました。

この管理を実現するのが「個体情報」です。資料に貼付したバーコードと書誌データを結びつけ、資料1点ごとの状態を管理する仕組みです。これにより、資料が東京

Web-OPAC（1999-2003）

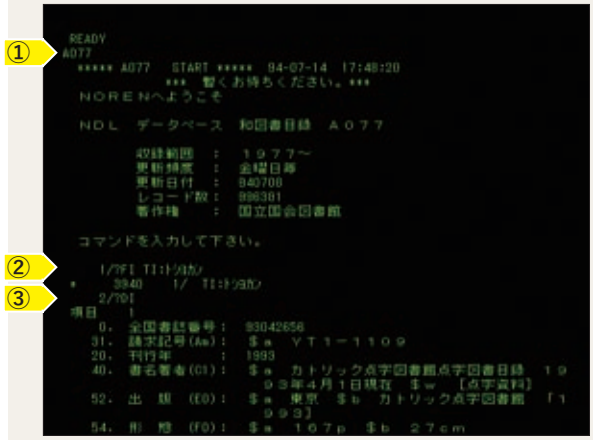
一見すると後年のNDL−OPACの検索画面と遜色ない印象を受けますが、資料の利用を申し込むための機能はまだ存在しません。館内で資料の閲覧を申し込む場合は、カード目録で検索していた時代と同様、資料請求票に請求記号や資料名を手書きで記入して、カウンターに提出する必要がありました。このため、Web-OPAC特有の機能として、画面上に資料請求票を模した記入例を表示する機能がありました。

なおカウンターの職員側でも、資料請求票を書庫の各層に送るために正確に振り分けるのは、経験の必要な難しい作業でした。



NDLホームページで公開された Web-OPAC のトップ画面

NOREN（1980-2003）



※画面は資料に基づく再現

NORENは、テキストによるコマンド入力で動作する、古典的な検索システムです。

システム上の制約により、データファイルは細かく分割されていました。たとえば和図書は、「明治期」、「大正期」、「昭和前期」、「1968 年まで」、「1976 年まで」……といった具合です。上の図では、A077 という 1977 年以降の和図書が収められたファイルを選び①、FINDコマンドで検索式を作り②、DISPLAYコマンドで検索結果を表示させています③。

なお、職員の事務用としてだけではなく、電話回線によるネットワークなどを通じて、公共図書館、支部図書館、国会関連機関から利用することもできました。

なお、NOREN は、National Diet Library Online Information Retrieval Network System の略で、日本語名称は国立国会図書館オンライン情報検索ネットワークシステムです。

和図書OPAC（1997-1999）

※画面は資料に基づく再現

NDL-OPAC（2012-2017）

NDL-OPAC（初代：2002-2011）

本館にあるのか、関西館にあるのかわかるだけでなく、誰かが利用中なのか、事務作業中なのか、東西間で資料搬送中なのか、あるいは閲覧室に開架されているのか……といったことが把握できるようになりました。

今となってはまったく当たり前のような機能ですが、こうした機能の裏には、大量の資料にバーコードを貼り、個体情報を設定するという、数年がかりの地道な作業の積み重ねが不可欠でした。

個体情報の整備にはもうひとつ大きなメリットがあります。NDL-OPACで検索してみつけた特定の資料に対して、そのままサービスの「申込み」ができるようになった点です。

お気づきでしたでしょうか。NDL-OPACの正式名称は「国立国会図書館蔵書検索・申込システム」なのです。

遠隔複写サービス

NDL-OPACのもう一つの目玉として、2002年11月に、雑誌記事索引540万件をインターネット上に公開したことがあげられます。蔵書を検索するOPACは、すでに多くの図書館に広がりを見せていましたが、雑誌記事索引のデータを、これだけ膨大な量インターネット上に公開したことは、大きな話題となりました。

さらに2003年1月には、インターネットを通じ、登録利用者が遠隔複写を「申込む」機能が追加されます。

これにより、利用者登録を済ませてインターネットからNDL-OPACにログインし、雑誌記事索引で記事を見つけ、複写を申し込む……、という遠隔複写サービスのいわば黄金ルートが確立しました。遠隔複写の申込み件数はわずか数年のうちに10倍近くまで跳ね上がりました。

NDL-OPACの発展

NDL-OPACの順調な滑り出しにより、個体情報の整備が有効であることが改めて明らかになりました。膨大な量の雑誌も徐々に個体情報が整えられ、何年何月号の所蔵があるのか、次第にわかりやすく整備されていきました。また、図書や雑誌以外にも地図や電子資料、博士論文など、新しい資料群が次々NDL-OPACから検索できるようになります。2003年11月には、データ件数は1千万件を突破しました（雑誌記事索引を含む）。

データの網羅性が上がることで、必ずしも何かを「申込む」ことを目的としなくても、ある作家の作品を一覧する、あるキーワードを含む本がいつ頃から出版されたか調べるといった調査ツールとしての使い方も一般的になっています。

その後も新たな機能として、該当する書誌データから、近代デジタルライブラリー（当時）や電子ジャーナルへのリンクもできるようになりました。

2012年には、NDL-OPACは今までの機能を引き継ぎつつ、新しいデザインへと生まれ変わりました。別のシステムだったアジア言語OPACを統合し、長く懸案だった24時間稼働を実現し、書誌提供の機能も拡充しました。全国書誌を提供する機能もNDL-OPACが担いました。2017年12月の時点で2，400万件以上のデータを提供するにいたっています。

そして2018年、NDLが開館70周年を迎えるこの年に、新しいシステム「国立国会図書館オンライン」へと生まれ変わります。

(1) 「和図書CD-ROM閲覧利用実験を終了して」本誌349（1990年4月）号 「閲覧用目録の機械化について」本誌370（1992年1月）号

(2) 「欧文会議録のOPAC設置」（カレントアウェアネスNo.143 1991.7.20）「洋図書のOPACを提供開始」（カレントアウェアネスNo.157 1992.9.20）

(3) 「国立国会図書館ホームページ改訂版紹介 書誌情報Web-OPACの検索について」本誌469（2000年4月）なお、これ以前も、1996年10月からは最新の1年分（約10万件）に限り、ホームページで和図書のデータを公開していました。

NDL ONLINE
国立国会図書館オンライン

平成 30 年 1 月 5 日より、国立国会図書館の新たな利用の窓口となる「国立国会図書館検索・申込オンラインサービス（略称：国立国会図書館オンライン）」を開始します。

https://ndlonline.ndl.go.jp/

国立国会図書館オンラインの機能をご紹介します。

検索機能

当館の蔵書と、当館で利用可能なデジタルコンテンツをあわせて検索することができます。

〇主な検索対象

・当館が収集した図書館資料
図書・雑誌・新聞、和古書・漢籍、日本占領関係資料、規格・リポート類など

・デジタルコンテンツ
国立国会図書館デジタルコレクション、電子ジャーナルなど

・雑誌記事索引

・視覚障害者等用資料

・当館製作学術文献録音図書

・主題情報
目次データ（リサーチ・ナビ）

申込機能

新設のカート機能により、同時に複数資料の申込みを行うことができます。

1.一般利用者(登録利用者)向けサービス

・閲覧

・閲覧予約（関西館のみ）

・取寄せ閲覧

・遠隔複写

・複写用記事掲載箇所調査

2. 公共図書館等機関向けサービス

・来館貸出

・郵送貸出

・遠隔複写

・レファレンス（平成30年1月より国立国会図書館オンラインの一機能となります）

その他

スマートフォン対応や、英文の申込画面を用意するなど、幅広い利用者を想定した改善を行うほか、利用者登録申請手続きの利便性向上をはかります。

1. スマートフォン対応

2. 英文の申込画面

3. インターネットからの利用者登録申請
国立国会図書館オンライン上で利用者登録申請を行う機能です。当館の遠隔サービスに限定してサービスを利用できます。

4. マイリスト
検索した書誌情報を保存できます。

5. 書誌ダウンロード機能（TSV 形式、BibTex 形式）

館内スコープ
—Back to 1997—

カード目録に別れを告げるころ

今から20年ちょっと前のことです。

東京本館の図書カウンターの周りは、今は利用者用端末で埋め尽くされていますが、当時はカード目録が入った木製のケースが立ち並び、「目録ホール」と呼ばれていました。CD-ROM目録などで検索できる資料が増え、カード目録を使う人は減っていましたが、和図書の書名目録と著者名目録には毎日新しいカードが追加されていました。

カード目録に関する業務は「図書整理課書架編成係」の担当でした。

週に1回、3000～3500枚のカードが届きます。これを受け取ったら、定規でカードの厚みを計って4・3㎝ずつの束に分けます。一束はおよそ150枚、1回の作業に割り当てられる分量です。毎朝5人の係員が一束ずつ持って目録ホールに行き、引き出しを開けて書名または著者名のよみの順にカードを入れます。

カードの下には丸い穴があいています。穴に金属の棒を差し込むとカードが引き出しに固定されますが、ひとまず棒は通さず、棒の上にカードを乗せておきます。一通り入れ終えたら別の係員が点検します。並び順が間違っていたら、目印としてそのカードを90度回転させて最初の作業者に戻します。間違いがすべてなくなったらようやくカードに棒を通すことができます。

慣れるまでは間違いも多く時間がかかりますが、ミスせず作業を終えられたときはうれしかったものです。単純作業ですが、それだけに経験を積んで上達していくのが実感できる仕事でした。

書誌データに誤りが見つかったときは1枚ずつ手作業で修正します。データベースでは1件のデータでも、カードは書名と著者名の2枚。さらにシリーズ名や共著者があると3枚、4枚…と増えます。修正液は使わず、かみそりの刃でカードの表面を薄くはぎとり、ボールペンで正しい情報に書き換えます。かみそりの力加減がむずかしく、深く削りすぎることもしばしばありました。

カードの追加は平成9（1997）年3月末で終了し、翌4月から和図書OPACの提供が始まりました。書架編成係は解散し、国立国会図書館の草創期から約50年受け継がれてきた業務は幕を閉じました。目録の主役がカードからOPACに代わる転換点に立ち会えたことは貴重な経験となりました。

（総務課 パタパタ）

数字で見る
国立国会図書館

『国立国会図書館年報 平成28年度』から

『国立国会図書館年報　平成28年度』をもとに、国立国会図書館の業務、サービス、組織に関するおもな数字を抜粋しました。
※数字は平成29年3月31日現在（平成28年度の実績）

国会へのサービス
依頼調査回答

3万9,402件

国会議員等からの依頼に基づき、国政課題や内外の諸事情に関する調査、法案の分析・評価などを行っている。

予測調査
（刊行物の論文記事）
325件

行政・司法支部図書館へのサービス
貸出 **7,163点**

支部図書館制度に基づき、各府省庁および最高裁判所に支部図書館が設置されている。この図書館ネットワークをもとに、図書館サービス、資料の交換が行われている。

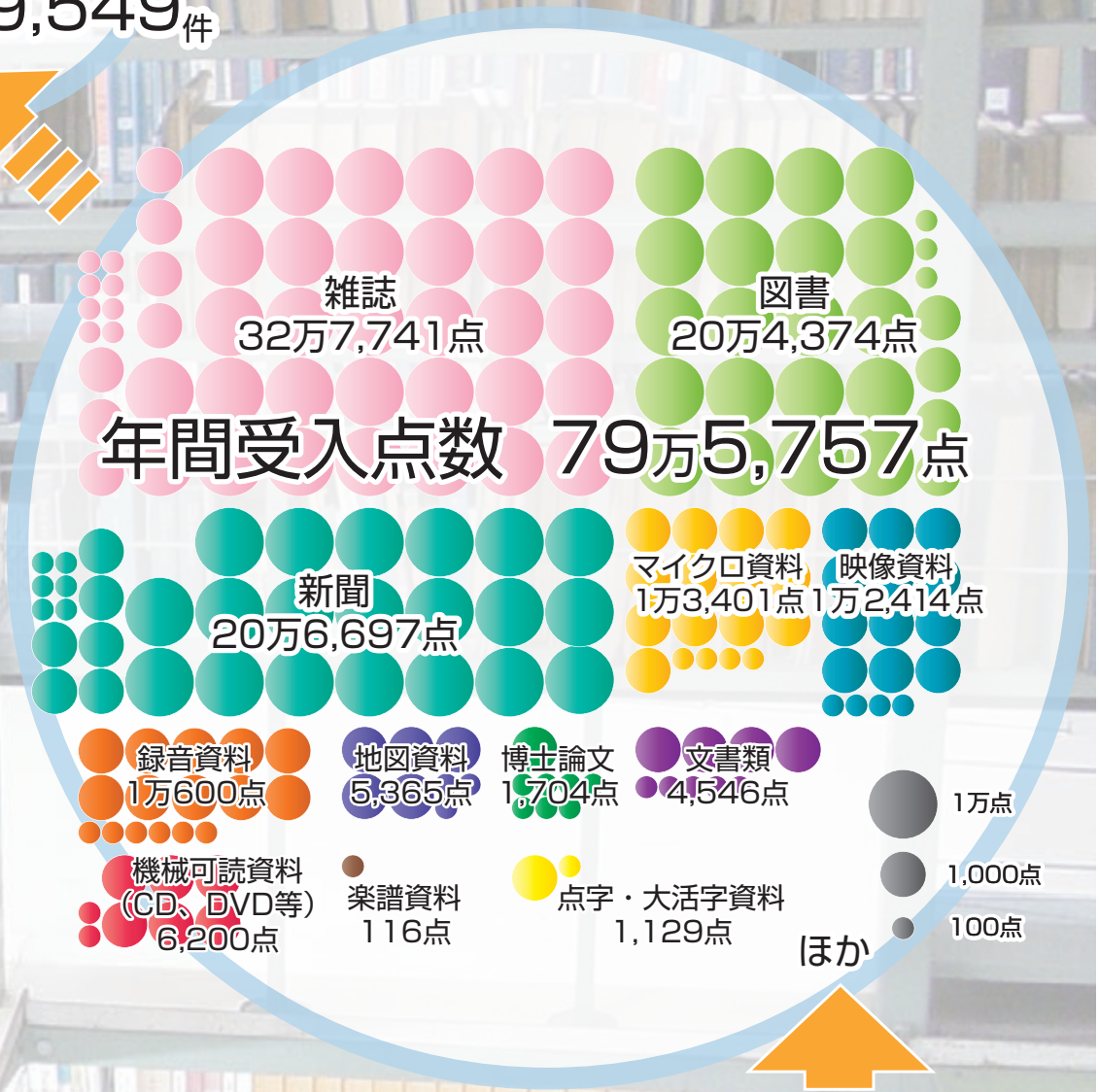
『国立国会図書館年報』は、ホームページでもご覧になれます。
http://www.ndl.go.jp/jp/publication/annual/index.html

書誌データ作成数（年間）

58万2,817件

書誌データ提供数（総計）

2,423万9,549件



来館者

75万6,372人

東　56万4,154人

西　7万　428人

子　12万1,790人

館全体の予算・決算

歳出予算現額

約197億6,687万円

決算額

約189億7,272万円

資料収集のための費用

約23億2,684万円

うち、納入出版物代償金

約3億9025万円

東 東京本館
西 関西館
子 国際子ども図書館

図書館等への貸出し
1万9,507点

図書館への貸出し、小中学生向けの学校図書館セット貸出し、展示会に出品するための貸出しがある

遠隔複写
25万3,653件

来館せずに申し込む複写サービス

所蔵点数（総計）
4,265万9,395点

デジタル化資料点数
インターネット公開
86万4,761点

図書館送信
149万9,332点
図書館向けデジタル化資料送信サービスの提供データ

館内限定
74万7,392点

来館複写
129万4,371件

うちプリントアウト件数
52万3,797件

来館して申し込む複写サービス

閲覧
232万2,228点

東 218万9,278点
西 10万8,416点
子 2万4,534点

来館して申し込む閲覧サービス

本屋にない本

中東・北アフリカ地域では古くから文明が発達した。深い歴史の中で形成され、宗教の影響を強く受けたこの地域の文化は魅力にあふれている。イスラム教が成立して以降、その勢いは広がり、多様な民族を擁する一大勢力圏を作り上げた。東西文化の十字路として大いに発展したが、近代に入り、西欧諸国の戦火の渦に巻き込まれ、現代では諸民族の利害を巡る対立が激化し、紛争地域という印象が強くなった。こうした歴史的な背景は複雑で、容易に理解できるものではない。異国の者が当事者の心境を知ることはさらに難しいのが現状であろう。

本書は、「紛争地域から生まれた演劇」シリーズの一冊として、国際演劇協会日本センターから刊行されたものである。演劇を通じて紛争地域の理解を深め、平和の構築を目指す国際演劇協会の事業「紛争地域の演劇」は、観客に力強く訴えかける演劇という手法により、紛争地域の問題を世界に投げかけている。日本では、これに対応する形で本書のシリーズが刊行され、また収録された作品を紹介するシンポジウムやリーディングなどのイベントが開催されている。

本書では、アラブ・イスラム世界の優れた現代戯曲3作品（パレスチナ・アフガニスタン・アルジェリア）を翻訳、紹介している。

1作品目の『3 in 1』は日常的な経験に基づく個人的な悩みをパレスチナ社会全体の問題へと昇華する作品である。続く2作品目の『修復不能』はアフガニスタン紛争を経験した10人のエピソードが演劇を通して語られるドキュメンタリー形式の作品となっている。最後の『包囲された屍体』はアルジェリアにおける植民地支配への抵抗と、フランスとの文化的同化への葛藤を描いた作品である。いずれも異なる年代や視点を描いており、文学的作品としても存分に満足できる内容となっている。

同時に、紛争地域に興味はあるものの、演劇になじみのない人には、本書を読むことを通じて是非とも演劇や戯曲のもつ力を感じてほしい。演劇は生きている。演じることで言葉に命が吹き込まれ、舞台上に架空の「現実」を出現させる。舞台の作り出す世界は観客を取り込み、現実を体験するかのような生の感覚を観客の内に呼び覚ます。演劇の台本である戯曲はこれに似た力がある。小説のように登場人物の心情や舞台の情景は事細かに記されておらず、台詞を中心に構成されているため、読み手が時に自身の経験と結び付けながら空想の舞台を思い描き、戯曲の世界を体験するかのような感覚を持つことができる。単に活字を追うだけではなく、自身の感性を研ぎ澄ましてを本書を読むことで、遠い異郷の現実を感じ、紛争地域の平和への道に関心を深めていただきたい。

（針谷 晃平）

アラブ・イスラム世界の現代戯曲

紛争地域から生まれた演劇 5

国際演劇協会日本センター［編・刊］
2014.3　167p　21cm
<請求記号　KE215-L2>

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

NDL Topics

システムリニューアルに関するお知らせ（4）

新しいサービスの開始

平成30年1月5日、国立国会図書館の新しいサービスが始まります。

・国立国会図書館検索・申込オンラインサービス（国立国会図書館オンライン）
・国立国会図書館書誌提供サービス（NDL-Bib）

遠隔複写や図書館間貸出など、システムリニューアルに伴い一時休止していましたサービスについても、受付を再開します。

最新情報は当館ホームページの「平成30年1月システムリニューアルのお知らせ」に掲載していますので、ご覧ください。

平成29年度国際政策セミナー「EUにおける外国人労働者をめぐる現状と課題―ドイツを中心に―」

少子高齢化などを背景として、我が国では外国人材の活用が検討課題とされています。国立国会図書館では、外国人材活用の外国事例を学ぶため、ドイツから、高名な法学者であるアルブレヒト・ヴェーバー氏をお招きして、ドイツにおける外国人労働者の問題についてお話を伺います。あわせて、日本の著名なEU法・ドイツ法の専門家とのパネルディスカッションを行います。皆様のご参加をお待ちしております。

○日時　2月23日（金）14時～17時
○会場　東京本館 新館講堂
○プログラム（日英同時通訳付き、入場無料）
〔基調講演〕
アルブレヒト・ヴェーバー氏（オスナブリュック大学名誉教授）
〔パネルディスカッション〕
・パネリスト
中坂 恵美子氏（中央大学文学部教授）
広渡 清吾氏（東京大学名誉教授）
・コーディネーター
中村 民雄氏（国立国会図書館客員調査員、早稲田大学大学院法学研究科教授）
○申込方法　ホームページ「イベント・展示情報」から2月21日（水）までにお申し込みください。定員（300名）に達した時点で受付を終了します。
○問合せ先　国立国会図書館 調査及び立法考査局 調査企画課 連携協力室　電話　03（3581）2331（代表）

国際シンポジウム「責任あるイノベーションと公共部門の役割：従来の官民境界を超えて」(仮)（国立国会図書館開館70周年記念関連行事）

国立国会図書館は立法府に属する図書館として、支部図書館を通じて、行政・司法各部門に対して図書館サービスを提供することによって資料・情報の側面から行政・司法の運営を支援するのと同時に、納本図書館として、これらの各部門から生成される情報を図書館サービスを通じて広く提供するように努めてきました。

この支部図書館制度が平成30年に創設から70周年を迎えることから、内外の学識経験者をお招きして国際シンポジウムを開催し、国立国会図書館もその一端を担う公共部門の役割の現代社会におけるあり方について、イノベーションを手掛かりに公共政策、社会学、政治経済といった複数の視座から議論します。

英日同時通訳付き、入場料無料です。ぜひご参加ください。

○日時　3月1日（木）14時～17時
○会場　東京本館 新館講堂
○登壇者
藤垣 裕子氏（東京大学大学院総合文化研究科教授）
フレッド・ブロック氏（カリフォルニア大学デーヴィス校教授）
ウルリーケ・フェルト氏（ウィーン大学教授）
デリアス・オーンストン氏（トロント大学教授）
ほか1名
○申込方法　ホームページ「イベント・展示情報」から2月21日（水）までにお申し込みください。定員（250名）に達した時点で受付を終了します。
○問合せ先　国立国会図書館 総務部 支部図書館・協力課 協力係　メールアドレス　lecture@ndl.go.jp

国際子ども図書館展示会「子どもを健やかに育てる本２０１７―厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）」

国際子ども図書館では、展示会「子どもを健やかに育てる本２０１７―厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）」を厚生労働省との共催で開催します。

児童福祉文化財は、子どもたちの健やかな育ちに役立ててもらえるように、絵本や児童書等の出版物、演劇やミュージカルの舞台芸術、映画等の映像・メディア等の作品について、厚生労働省社会保障審議会が推薦を行っているものです。

この展示会では、同審議会が平成28年4月から平成29年3月の期間に推薦した、絵本や図書32作品を直接手にとってご覧いただくことができます。

入場は無料です。ご来場をお待ちしております。

○開催期間　1月23日（火）～2月10日（土）
※1月29日（月）及び2月5日（月）は休館
○開催時間　9時30分～17時
○会場　国際子ども図書館 レンガ棟3階 本のミュージアム
○問合せ先　国立国会図書館 国際子ども図書館 資料情報課 展示係　電話　03（3827）2053（代表）

NDL 百景

＃6
東京本館目録ホールの様子
（『国立国会図書館 50 年のあゆみ』より）

新刊案内

レファレンス　８０２号

ヨーロッパ君主国における王位継承制度と王族の範囲
―近年まで又は現在、男系継承を原則とする国の事例―
外国につながる子どもの学校教育
―移民の国アメリカの学力向上を目指す改革―
イタリア共和国憲法と緊急事態

A4 70頁 月刊 1,000円（税別）
発売　日本図書館協会
〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14
電話　03（3523）0812

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2018.1

1

NO.681
JANUARY
2018

CONTENTS

New Year Greetings for 2018

03 <Book of the month - from NDL collections>
A *nishiki-e* calendar sent overseas from Japan
— *Kawamata kenpu seiren kabushiki gaisha meiji yonjūsannen karendā*

06 Books not found in the NDL
A style guide for letter writing during the early Meiji period

12 Browsing library materials — Reading Japanese written in variant kana 1
Let's learn the variant forms of the cursive Japanese syllabary.

16 NDL and OPAC from 1989 to 2017

23 The NDL in figures: from the Annual Report of the NDL, FY2016

22 <Tidbits of information on NDL>
Farewell to the card catalog

26 <Books not commercially available>
Arabu・isuramu sekai no gendai gikyoku: Funsō chiiki kara umareta engeki 5

27 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

平成30年1月号（No.681）
平成30年1月1日発行

発行所　国立国会図書館
編集責任者　秋山　勉

印刷所　株式会社 丸井工文社

〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話　03（3581）2331（代表）
FAX　03（3597）5617
E-mail　geppo@ndl.go.jp
http://www.ndl.go.jp/

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文　中性再生紙使用

ISSN 0027-9153

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2018.1

国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図 国 国
書 会 立

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。